
泥棒エイプリルフル

金剛石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泥棒エイプリルフル

【Nコード】

N6465K

【作者名】

金剛石

【あらすじ】

PLAN“April First”参加作品。4月を題材にした企画。その短編です。泥棒とヤンキーと真面目君と彼女とオウムと気取ったnec.が生み出す変(?)な話です。これでいいのか？ 読了後、そんな不思議な後味を残すことができれば幸いです。感想や評価などしていただけたら嬉しいです(^^)ゞ

（前書き）

「本気」と書いて「マジ」と読む

「自転車」と書いて「チャリ」と読む

「天鰲絨」と書いて「ビロード」と読む

「提琴」と書いて「バイオリン」と読む

「四月一日」は「エイプリルフル」と読む

\$

——ウソウソ

鳥かこの中のオウムが甲高い声で鳴き叫ぶ。白い羽毛に覆われた立派なオウムだ。カラスより、一回りほども大きい。

——ウソウソ。ウソウソ

「おい真田《さなだ》、見透かされてるぞ」

鳥かこの手前に立っている三十代前後の男が、そのオウムを見ておかしそうに言った。黒いニット帽をかぶっている。

「そんなわけねえ。鳥に嘘が見抜けてたまるか」

真田と呼ばれたもう一人の男は、かけていた黒いサングラスを外してオウムを睨む。こちらと同じような年代の人間だ。オウムは不思議そうに首をかしげ、男の視線を受け止めている。

「俺は悪い人じゃない」

オウムのキラキラと輝く黒い瞳から目を離さずに、真田が低い声で言った。

——ウソウソ

オウムが嘴を開いて、淡々と答えた。

真田が軽く舌打ちし、隣のニット帽の男、幸村ゆきむらがそれを見て笑い

をこらえている。

「俺は女に興味なんてまったくないし、万引きなんて一度もしたことがない」

真田が再び低く小さな声で宣言する。

——ウソウソ。ウソウソ

オウムは嘲笑うかのように、きいきい声で喚いた。幸村がとうとう吹き出す。

「ほら見る、バレバレだぜ。動物つてのは悪事に関して人一倍敏感なんだよ。ウソツキはすぐ分かっちゃうんだ」

「うるせえな。んなわけないだろ」真田が意地になって言い返す。
「オウムが適当に返事したただけだ」

——バーカ。ヘヘッ、アホだ

そんな真田をオウムがコケにした。そのあまりの口汚さに、真田と幸村は一瞬、呆氣にとられる。

「こいつ！」真田が鳥かごの金網越しに、達者な口調の鳥類へ殺気を注ぎ込む。「羽を怪我して店の前に落ちてたのを助けてやったつてのに」

二人がこのペットショップを出ようとした時、店の扉の前でオウムがうずくまっていたのを見つけたのだ。翼に硬い植物の棘とげが刺さったせいで、飛べなくなっていたらしい。

——バーカ。ヘヘッ、アホだ。バーカ。ヘヘッ、アホだ

オウムは堪忍袋の緒が切れかかっている真田のことはつゆ知らず、挑発の言葉を連発する。

「よくもまあ、こんな育ちの悪いオウムがいるもんだ。飼い主の顔

が見てみたいな」幸村はケタケタと笑いながら、明かりのスイッチがある壁際に向かう。「そう言えば、明日ウチに新しい店員が入ってよ。聞いたところによると、事情ありの奴らしいが」

「新人？」真田が訊き返した。「事情あり？面倒くさそうだな」

「仕方ねえよ。バイト員として来るらしい。ペットショップの何に魅力を感じて来るんだろうかね」

幸村が店内の明かりを消しながら、そうこぼす。

真田は今だに白いオウムと睨めっこをしていた。幸村はあくびしながら店の外へ通じる扉を開ける。

「そんなのほつといて帰るぞ。勤務時間も過ぎたし、色々とのんびりしてられないだろ」

「分かった……」

声をかけられた真田は不服そうに店の出口に向かおうとしたが、何を思ったのか急に立ち止まった。そして、オウムに向かって再三話しかける。

「俺達は空き巣だ。今晚盗みに入る。これがホントなのかウソなのか、分かるなら言ってみろ」

幸村は、オウムにそう問いかける相棒に呆れてため息をついた。

「だから、さつきも言っただろ。動物には嘘が分かるんだよ」

幸村はそう言っただけで店の外へ出ていく。

オウムは一瞬の沈黙の後、両翼を広げて胸を張り出した。

——ホントホント

真田は一つ嘆息をついて店の出口に向かう。

「動物って、マジで真実と嘘を見抜けるのか？」

独り言を残して、真田は店を出ていった。

オウムはその後ろ姿を見つめながら首をかしげている。

——アキス、アキス

夜の薄暗い店内にオウムの鳴き声が虚しく響いた。

「ダイヤがほいほい。真珠もほいほい」

「見るよこれ。柘榴石の指輪だ」

初春の夜ということもあり、肌寒い。ところが、虫達がやおら起きようかとのろのろ動き出すこの時期でも、空き巣はきびきびと悪事に励む。

暗い部屋の中を、二人の人影が怪しげに蠢いている。

「柘榴石？ ああ、ガーネットか。最近はお目にかかれなかったよな」

幸村が黒いニット帽をかぶり直しながら、真田の手元に顔を寄せらる。ニット帽の下にはスキンヘッドが隠れていた。

空き巣に入ったこの家は相当の金持ちらしく、宝飾品が大量に見つかった。真田が調べたところ、ちょうど家族で旅行に出かけているらしい。格好の獲物だ、ということで真田や幸村はこの家に侵入することを決めたのだ。

「だいたい宝石はかき集めたか」

「だな」

二人は満足そうに頷き合う。真田はジャージのズボンのポケットから白い紙とボールペンを取り出し、何かを書きつけた。“ 銭 ” の模様が縦と横に2×3、合計六つ描かれている。

「宝石をいくつか頂戴致しました、と」

それにメッセージを添え、真田はリビングのテーブルの上に置きに行く。その間に、幸村は荒らし回ってごちゃごちゃになった部屋を綺麗に片付け始めた。

「しかし、ほんとにでかい家だな」

リビングから戻ってきた真田が、幸村を手伝いながら羨ましそう

な声を漏らす。

「へっ、だから俺達みたいなのに狙われるんだよ」

幸村は少しの負い目も感じさせない物言いで、吐き捨てるように言った。

幸村は手袋をした手で突破したドアを開めた。ピッキングで開けた玄関の扉だ。頑丈なロックがかかっているように見えるドアも、幸村にかかればただの板に過ぎない。ちよつと手を返すだけで容易に開けてしまうことができる。

「ちよろいもんだな。二重ロックのドアも、ここまで脆い^{もろ}んじゃ話にならねえだろ」

不敵な笑みを浮かべる相棒の顔を見ながら、真田はため息をつく。「お前がいつ俺の家に入ってくるか、心配でおちおち夜も寝られねえよ」

深夜の細い道路を、二人はこそそこそと移動していく。周りの家の明かりはついていない。先ほど盗みに入った家が、月明かりに黒々と浮かび上がっていた。普通の家の二倍ほどの大きさはあるだろう。「やっぱでけえな」

真田がぼそりと呟く。

星々が闇の中で小さく瞬き、二人の男を見下ろしていた。そうやって、空に散りばめられた煌めく宝石達は、寒々とした春先の夜を飾りつけている。

その時、突然吠え声が響き渡った。幸村が小さく悲鳴を上げて跳びずさる。

通ろうとした道の曲がり角から、鎖に繋がれた白い中型犬が現れたのだ。浮き足立つ二人をよそに、犬はワンワン吠え立てる。

「ヤバイ。急いでずらかつとこうぜ」

幸村が冷や汗を額に浮かべながら犬とは反対方向へ走り出す。

「ズラ買つところ？ 何だ、今になって髪の毛が恋しくなったのか？」

真田が背後の犬に手を振りながら、真顔で幸村に訊く。

幸村はニット帽を上から押さえつけて真田を睨んだ。またか、と呆れているような目だ。

「お前の家には、どれくらい金がある？」

幸村はこめかみをヒクヒクさせている。真田は肩をすくめて答えた。

「二百万かな」

「喜べ、明日の夜には消えてるぞ」

「お前の育毛代にか？」

幸村はギョロリと真田を睨んだきり、押し黙った。不機嫌そうにため息をつく。幸村がピッキングのプロなら、真田は口喧嘩のエキスパートだ。

「きつと犬は分かってたんだな」幸村と並んで走っている真田がしみじみと呟く。「動物は嘘とか悪事に敏感なんだろう？」

幸村はむすつとしたまま、無愛想に答える。

「そうだ。人間が嘘をつく生き物なら、他の動物はみんな正直者だ。動物は鋭い本能で危険や悪を察知するんだよ。地震が起こる前にナマズが暴れるとか、津波が来る方からネズミは逃げるとか、番犬は盗人には吠えるとか」

「だからか。今朝、目の前を通るガキには吠えない犬が、俺に吠えてたのは」

「知らねえよ」

「明日は四月一日か。中学校生活もあっという間だったな」

長い髪の毛を真つ茶っ茶に染めた少年が感慨深そうに呟く。ワックスで整えられた髪は、今時の若者らしく適度に立っていた。首にかけている十字架クロスのシルバーアクセサリーが光っている。

「何をしみじみ言ってるんだよ。明日から高校行かずに働くんでしょ？」

その茶髪の男子の隣には、眼鏡をかけた真面目そうな少年がいた。髪は黒いし、華奢な体つきで運動が得意そうでもない。どちらかというと内気なタイプに見える。

対して、茶髪の男子は活発そうなヤンキーという出で立ちだ。妙な組み合わせの二人だと言えなくもない。その二人は、ベッドの上であぐらをかいて話し合っている。

「まあな。チャラチャラ遊んでた俺が高校行けるわけないし」茶髪の少年が自嘲気味に答えた。「隼人はやとはあと五日経ったら高校の入学式か？」

眼鏡の少年がそれを聞いて頷く。

「そう。都会まちの方に高校があるから寮生活しなきゃいけない」

「苦労すんのはお互い様だな」

一志は苦笑しながら就職先の説明書をパサパサとあおいだ。

「それで、明日、橋本はしもととはどうするの？」隼人が訊き返す。「またデート？」

「ああ。あいつは高校行くけど、俺と別れたくないって言うてくれたしよ」茶髪の少年はにこやかな笑みを浮かべる。「明日でちょうど付き合って一周年だ。記念に指輪をプレゼントしねえと」

橋本と茶髪の少年——木村一志きむらかずし——は一年前から付き合っている。周りはそれを知って仰天したものだ。

一志は校内一の問題児で、授業はサボるし、先生にはため口を遣うし、あちこちで喧嘩を起こし……のまさにヤンキーと言うにふさ

わしいことばかりしていた。その問題児が、美人で運動・勉強ができる橋本と付き合うと言うのだ。驚かないはずがない。一志も顔立ちが端正なのだが、あまりの暴れっぷりに密かに周りから疎まれていた。

彼は三歳の時に母親を重い病気で失っているらしく、グレるのも分かるかもしれない、と隼人は思っている。

「でも、付き合ってからは一志もおとなしくなったよね」

隼人が笑いながら言った。懐かしそうな目で、昔を見つめている。「まあな。俺も、お前のことを殴ったことあったけど……どうして、今こうしてるのか不思議だ」

一志は申し訳なさそうに笑う。

隼人と一志の出会いには実に過激だった。道路の曲がり角でばったり出くわして衝突し、一志は鼻から出血、隼人は眼鏡を割った。腹を立てたかつての一志は、隼人の横顔を殴ったのだ。

ところが、色々な紆余曲折を経て、隼人は一志に殴られたことを許した。それから、二人は親しくなったのだ。

その後、一志は橋本と付き合い始め、彼女の愛の鞭むちのせいかな随分な変貌へんぼうを遂げる。授業や先生に対する態度は相変わらずだが、周りに暴力を振るうことはなくなったのだ。

そして、今、一志と隼人の二人は親友になっている。

「今思うと、あのぶつかった時は俺が悪いんだよな」一志が頭を掻きながら呟く。「吠えてたわけじゃないけど、道沿いにいた誰かの家の犬にビビって慌てて走ったらお前とぶつかったんだ」

「喧嘩には強いのに、犬にはビビるんだ？」

隼人はそれを聞いて笑い出した。

「うるせえな。昔、どっかの犬にちよっかいかけてたら噛まれたことがあるんだよ」

一志は忌々しそうに手元の雑誌に目を落とした。

「あ、占いが載ってる。えーと、何だ？」

一志の気が逸れたので、隼人もその雑誌を覗き込む。「サクセス」

と言つ名の月刊誌だった。

「マジかよ」一志が残念そうに呻く。^{うめ}「明日、あなたの予定は失敗する。友達や恋人を大切に、だと?」

隼人は一志が指で指し示すところに注目する。確かに、一志が言つた通りのアンラッキーなことが書きつけてあつた。

「災難だね」

隼人は他人事^{ひたひた}のように言つとクスクス笑つ。

「友達や恋人か……」

しかし、隼人の笑い声には気にも留めず、一志は机の上に置いてあつた小さな箱を手にとつた。顔は微妙に憂いを帯びている。

箱を開くと、ほんの小さなダイヤがはめ込まれた指輪が現れ、静かに輝いた。

「あ、ダイヤは四月の誕生石だね」

横から見ていた隼人が、雑誌「サクセス」の記事を読み上げる。

占いのページに誕生石の説明が載っていたのだ。

「四月の誕生石、ダイヤモンド。別名、金剛石^{こんごうせき}。 “永遠の絆・純潔

”の意、だつてさ。永遠の絆つて、一志と橋本の関係にピッタリじ

やん。二人が付き合い始めたのも、去年の四月一日だし……いいね」

「おお、そうだったのか。適当に買った物だけど、大正解だったな」

一志は嬉しそうに笑つた。

「適当に、つて」呆れ顔で隼人が小さく苦笑する。「そう言えば、

橋本の誕生日には何をあげたの?」

隼人は橋本は一月生まれだと知っていたので、そう質問した。明

日に記念として指輪をプレゼントするなら、誕生日には何か別の物

を渡したのだろう。まさか、二回とも指輪ではないはずだ。

「あいつの誕生日にはこれを渡した」

一志は首にかけている十字架のネックレスをつまんで持ち上げる。

「なるほど。おそろい、つてわけね」

隼人が納得したように頷いた。

「つたく、このネックレス二組と今回の指輪を買つたから俺は一文

無しだぜ」

一志はそう言って肩をすくめた。そして、わざとらしくひもじそうな顔をして隼人に迫る。隼人は嫌な予感がして、慌てて逃げようとした。

「だから、俺は飯を買うマネーも無いんだ。頼む、何か驕^{おご}ってくれ。今日は親父が仕事で遅いから、晩飯自分で何とかしねえといけないんだ」

逃げ切る前に隼人は両肩を掴まれ、力任せにゆさゆさと揺さぶられる。

「わー、わー！ オ、オーケー！ 分かった、分かったって！」

隼人は観念して、自分が飲んでいたペットボトルのコーラを差し出した。中身はほとんど減ってない。

「ほらほら、ちよつと分けてやるから」

ところが、それを見て一志は首を振る。

「ちよつとじゃだめだ。どうせなら全部」

「おいおい、全部はやめてくれよ。俺も、もう少し飲みたいんだから」

「じゃあいい。間接キスになるもんな」

一志は意味不明なことを言って拒否した。

「またそれ？ この前俺が食ったチーズケーキを横取りして丸呑みしたのに？」

潔癖症なのか、一志は自分が一度口をつけたものは誰にも分けようとしなかった。そのクセ、人の食べているものは食い尽くしたがるのだ。都合のいい潔癖症だ。

一志と隼人は、お互い、困った時に助け合ってきた仲だった。

隼人はその体格や性格から理解者も少なく、頻繁にイジメの対象になる。よくある、「イジる」という言葉でカモフラージュされた

「イジメ」だ。

ところが、一志はそんな誤魔化された「イジメ」を最も嫌う人間だった。隼人もそれは意外だった。一志は、嘘や誤魔化しが大嫌いだということに。

隼人が一志と知り合ってから、隼人に火の粉をかけにきた生徒は、ことごとく一志の怒りの業火に打ちのめされた。一志という爆弾が隣にいるお陰で、隼人はイジメに遭う機会がめっきり減ったのだ。

しかし、その一志の行為は、つま弾き者にされていた一志を一層浮き立たせることにもなる。

そんな中、一志は自分が思いを寄せる相手を隼人に告白した。橋本だ。

橋本と隼人は幼馴染みで、学力もほとんど一緒だったために目的の高校も同じである。そのため、隼人は一志の有力な相談相手になった。誰よりも橋本のことを知っているからだ。

暴力的な解決法だったとはいえ、幼馴染みをイジメから守ってくれていた一志を橋本も一目置いていた。それに隼人の仲介もあって二人はめでたく恋人同士になる。橋本はヤンキーっぽい男子が好みで、そういう漫画や小説ばかり読んでいることを知っていた隼人が巧みに言いくるめたという勲功くんこうもあったが。

そんなこんなが出来事があった、一志に対する周囲の見る目が変わる。羨望せんぼうや妬み、恨みの目で見られることもあれば、他人をイジメから救ったという称賛の目でも見られた。疎まれ、背けられてきた視線が、良い意味でも悪い意味でも一志に向けられるようになったのだ。

一志は隼人から借りてきた五百円でハンバーガーを買い、それをかじりながらファストフード店の中の一隅で考え事をしていた。

実は昨日、橋本ともめ事を起こしてしまっていたのだ。そして、

彼女はそれについて烈火の如く怒っている。

だから、明日、橋本に弁解しなければならぬ。隼人にはデートと言ってあるが、指輪と謝罪のために会いに行くというのが本音だった。

一志は迷っている。彼女に本当のことを伝えるべきか。それとも嘘を伝えるべきか。

一志は嘘や誤魔化しが大嫌いな人間だ。だが、もし真実を伝えたら……。

ファストフード店を出て、商店街を練り歩く中、一志は行き交う人々に目を向ける。皆、ごく普通の生活を送っているのだろう。誰もが急ぎ足で歩いていく。日本人は時間に追われて生きている、という誰かの言葉を思い出した。

自分はどれほどの時間に追われているのだろう。一志はふとそう考える。

そんな中、一志の耳にどこからか声が飛び込んできた。

「だから、さつきも言ったろ。動物には嘘が分かるんだよ」

一志の周りの時間が止まる。

「動物には嘘が分かるんだよ」

頭の中で先ほどの声がこだました。

一志は商店街の上に広がる空を見上げる。

明日、何を伝えるべきか、一志は決心した。

辺りはもう暗い。空に散りばめられた煌めく宝石達は、寒々とした春先の夜を飾りつけている。

「人間がウソツキなら、他の動物達はみんな正直者なんだ」

「分かったから何度も言うなよ」

一志が声のする方を見ると、ペットショップから二人の男が出てくるところだった。

一人はサングラスをつけ、一人はニット帽をかぶっている。その二人組は、肩を並べて商店街の通りを歩き去っていった。

十 女 十

橋本が外出する支度を整えてリビングにやって来ると、八歳の妹が雑誌を抱えて走り寄ってきた。雑誌の表紙に「サクセス」と派手な文字で書かれている。

「ねえ、ほらほら、誕生石のことが書いてあるよ。今日は四月一日だから、四月の誕生石は……ダイヤモンドだね」

橋本が覗き込むと、占いページに誕生石の一覧が載っていた。

「本当だね」

幼い妹に笑顔で答える。

ダイヤモンド、永遠の絆・純潔の意。

「そう言えば、さつき一志君から電話があつたよ？」

「電話？」橋本の表情が強張る。「何て言つてたの？」

二階の自室にいたので電話が鳴ったことに気づかなかつたのだ。一昨日の件もあつて、昨日は一志から何の音沙汰おとさたもなかった。

一昨日、デートの帰り道で、橋本が一志に不意打ちキスをしようとした。それが恋人として、二人のファーストキスになるはずだった。ところが、一志は咄嗟に橋本の頬をはたいてそれを阻止したのだ。

当然、今でも橋本はそれに腹を立てている。その怒りを察知してか、昨日は一志からお休みメールすら来なかった。
「私が出たら、お姉ちゃんに伝言を伝えてくれって言ってた。ええと、今日の朝十時に、商店街のいつもの所で待ってるから……」
妹は一呼吸間を置いて続ける。

「別れる相談をしよう、だつてさ」

十の十

一志は商店街の待ち合わせの場所へ向けて、道路を一人歩いていった。春休み中なので、朝でも車の通りは少ない。辺りには小鳥が鳴く声と、住宅から漏れてくる食器を洗う音くらいしか静寂を飾るものはなかった。

のどかだな。

春先の暖かい日差しを浴びながら、一志はふとそう思った。誰かの家の庭にある桜は、目一杯に咲き誇っている。

一志は道の曲がり角を曲がった。

その瞬間、視界に白いものが飛び込んできた。

「うおっ！」

慌てて跳び退き、一志は反対方向へ向かって走る。

白い物体の正体は、鎖に繋がれた犬だった。

一志は少し離れた所で膝に手をつけて息を整える。

今思い返せば、あの道角は一志と隼人が初めて出会った場所だ。そう、犬に驚いた一志が、慌てて走り去ろうとして隼人にぶつかっ

た場所。

膝に手をついている一志が足元の地面を見渡すと、何かが落ちて
いるのが見えた。

それをじっくりと見つめる一志の目が、皿のように丸く見開かれ
る。

朝の光を浴びて、それは燃えるような赤に煌めいていた。

\$

「どういうことだ？」

幸村が真田に詰め寄る。朝の日の光が窓から差し込んできていた。
ここは、とあるアパートの中の、真田が借りている一室だ。

「やっちゃったぜ。本当につくづく縁がねえな、この宝石にはよ」
真田が肩を落としながら、雑誌「サクセス」の占いページを指差
す。占いが書かれている欄の下に、誕生石の情報が書き込まれてい
た。

真田の指は、一月の誕生石、赤く輝くガーネットを示している。
石榴石だ。

「昨日の夜、俺達が犬にビビって走った時に、ポケットに入れたコ
イツを落としちゃったみてえなんだ」

真田がきまり悪そうに弁解する。幸村は呆れてものも言えない、
というような面持ちだ。その幸村は、思い出したようにカレンダー
を見て、真田に尋問する。

「まさか、今日がエイプリルフールだからって、そんなくだらねえ
嘘ついたんじゃないだろうな？」

「嘘なんかつくかよ。動物に誓って、俺は本当にガーネットの指輪を落としちまったんだ」

「お前は口が上手いからな。怪しいんだ」

「誓って嘘はついてねえ。なんなら、昨日拾った生意気なオウムにだって誓ってやる」

真田が真顔でそんなことを言うので、幸村も諦めてため息をついた。

「久し振りの柘榴石だったのにな。ったく、俺が探しとくから、分け前の配率は上げさせてもらおうぞ」

「ああ、分かった。ガーネットも、見つけたらお前がもらってくれ」
真田は自分に非があると認めて幸村の要求を呑んだ。ポケットにしまっておくから悪かったのだ。

真田は嘆かわしそうに手元の雑誌に目を移す。自分の占いの結果を見ようと思ったのだ。真田はそれに目を通しながら読み上げた。

「大切な物を失う。白いものに厄あり」

真田の口が半分開く。

大切な物はガーネットの指輪だろう。白いものとは、昨晚、空き巢の帰り道に出くわした白い犬のことだろう。

全部当たっている。

十の十

「二人の水入らずのデートに邪魔して、なんか悪いね」
近くの公園で、隼人と一志は合流した。

昨晚、一志は橋本だけでなく隼人にも真実を伝えようと決心したのだ。それで今、隼人と一志は一緒に商店街へ向かっている。

「いや、橋本だけじゃなくてお前にも言わなきゃいけないことがあるつてよ」

一志は軽く苦笑いした。占いに「友達や恋人を大切に」と書かれていたのを思い出し、隼人にも話すべきだと考えたからだ。一志にとって、隼人は数少ない友達だ。隠し事をしていては居心地が悪い。二人が肩を並べて歩道を歩いていくと、巨大な住宅が現れた。周りの家々を圧倒するかのようにつんでいる。それだけでなく、その家の前に、数台のパトカーが止まっていた。

「こりや木戸きとの家だな」

一志が軽蔑するような声音で吐き捨てる。

木戸とは自分の家が金持ちなのを鼻にかけて、父親しかいない一志の家庭を馬鹿にしたり、隼人に対して執拗に「イジメ」をしたりしてきた男子だ。

その木戸が、家の中から一志達を目ざとく見つけて駆け寄ってくる。

「あーあ、やられちまったよ。宝飾品とかがごっそり盗られた」

「そりやご愁傷しゅうそうさま」

一志が「ざまあ見ろ」と顔に嘲りの色を塗りつけて応えた。

「見る、これが犯人が残したメッセージだ」

木戸は、被害を受けたというのにまるでそれを自慢するかのような物言いで、一志はそれがまた気に入らない。

木戸が隼人と一志に見せた写真には、白いメモ用紙に“銭”の絵が縦と横に2×3の合計六個描かれている。「宝石をいくつか頂戴致しました」とメッセージが記されていた。

「家族旅行に行ってる間にね、飼っていたペットには逃げられるし、空き巣には入られるしで、本当にまいったよ」

気取った言葉遣いに隼人もイライラしてきていた。洒落でもなく、本当に“木戸”った態度だ、と隼人は考える。

「ま、そんだけめばしい物がうちにはある、ってことで、プラスに考えることにするよ」

木戸は嫌みな土産言葉を残して帰っていく。

隼人はその後ろ姿を睨みながら、呟いた。

「さっきの銭のマーク、六文銭だね」

「六文銭？ 何じゃそりや？」

一志が怪訝な顔で訊き返す。

「六つの銭は仏教の六道銭、つまり死者のお賽銭を意味しているらしいよ」

隼人が雑学知識を頭から引つ張り出してきた。隼人は雑学にも通じているのだ。

「何でその賽銭マークなんかをわざわざ書き残したんだ？」

「六道っていうのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つの迷界を表していて、人が死ぬと三途の川の渡し賃として六枚の銭を棺に入れたそうだよ。なんでも、六枚の銭を入れることによって六道にいる地蔵にお救いを願うとか」

隼人の説明を聞いて、一志は首をひねりながら言った。

「なんかよく分かんねえけど、あの世の沙汰も金しだいってところか」
隼人はそんな一志の難しそうな顔を見て笑う。

「そんな感じだね。空き巣なんて後ろめたいことやってるから、気休めに六文銭をシンボルマークにしてるんじゃない？」

「なるほどな」

一志もおかしそうに笑った。

「戦国武将、真田幸村の真田家の家紋がこのマークだったはずだよ。家紋としての意味は、六文銭があれば死んでもあの世で充実した生活を送れるから、思う存分死ぬ気で戦おうってことらしい」

「今の場合は思う存分死ぬ気で盗みまくろう的な感じか」

「だね」

二人はユニークな発想力を持つ犯人の話をしてケタケタ笑い合っていた。犯人もよく考えたものだ。

その時、事件のあった例の家から“木戸った”男子現れて、こちらに叫んできた。

「バーカ」

木戸がそう言つて、鼻で「へへッ」と笑い、一志達を指差す。

「まだそこにいたの？ そんなにこの家に見とれてたわけ？」

談笑に水を差された二人は、途端に不機嫌な顔になる。

木戸は人を小馬鹿にする時に、「バーカ。へへッ、アホだ」と口癖のように言うのだ。「へへッ」と鼻で笑う辺りが“木戸った”人間らしく、余計に腹の立つ要因になっている。

「あんな奴に育てられるのが嫌になって、ペットも逃げ出したんだろつな」

木戸の家から遠ざかりながら、一志が左手の親指で背後の巨大な家を示す。

「あいつ、何飼つてたっけ？」

「確か、大型の白いオウムだよ」

一志はそれを聞いて目を丸くした。豆鉄砲をくらったかのような表情だ。

「おいおい、ロクでもねえな。あいつの口調がオウムに移ってなきやいいが」

「移つてると思うけど」

隼人と一志は、肩を並べて歩いていく。

橋本はとある墓石の前で、一人佇んでいた。

墓地のあちこちに生えている桜の木が、淡い桃色の花を咲かせて春の訪れを祝っている。

橋本は、今日この四月一日、三十回目の春を迎えた。だが、自分が愛した者は、一緒にその春を迎えることができなかった。

「やあ」

肩を沈めて静寂に浸っている彼女の耳に、聞き慣れた男の声が飛び込んでくる。声がした方を向いた橋本は、目を丸くした。

「隼人！ 今朝、仕事があるから墓参りには来れないって、電話で言ってたじゃない」

群立する墓石の合間を縫うようにしてやって来たのは、華奢な体きさげのサラリーマンだった。

「エイプリルフルだよ、エイプリルフル」隼人は笑いながら橋本の隣で立ち止まる。「久し振りだね」

「まあね」

二人は軽い挨拶を交わすと、じつと目の前にある墓石に見入った。辺りを再び沈黙が包み込む。そよ風が桜の花びらを運んできて、「木村家」と彫られた墓石を優しく洗った。

墓石の右端には「木村一志」と黒く彫り込まれている。

——五年前、一志は亡くなった。

一志は“エイズAIDS”がもとで死んだのだ。

中学校を卒業して迎えたあの四月一日、エイプリルフル一志は隼人や橋本へその事実を話したのだった。

一志の家庭は母親がいない。隼人達は、一志が重病で母親を失っ

たのだと知っていた。だが、その母親の病もまたエイズだったことは知らなかった。

一志は中学校へ入る時に、別の町から引越してきたらしい。小学校の頃、エイズ患者だというだけで一志はイジメられていた。父親が学校に事情を伝えたのが漏れていたのだ。それもあって、その町で暮らすことが辛くなり、引越した。

一志が「イジメ」を毛嫌いしていたのは、自分がイジメられていたから。嘘や誤魔化しを拒絶していたのは、父親や医者が原因だった。幼い一志も、年を追うごとにエイズの実態を掴んでしまったのだ。

特に、小学校六年の頃、学校のパソコンを使ってエイズのことを知った時、一志は衝撃を受けてしまう。

『絶対治るから』

——そう言って微笑む看護師達も

『だんだん良くなっているね』

——そう言って励ます医者も

『お母さんは別の病気で天国に行ったんだ。お前は別だよ』

——そう言って一志を勇気づけた父親も

すべて、何もかも、ことごとく——

——ウソだった

エイズは治せない。これと言った特效薬もない。

エイズは時を追うごとに病状が悪化していく。

一志は母親の胎内にいるときに、エイズに感染した。いわゆる、母子感染だった。

人々から一志に送られた言葉は、皆、嘘や誤魔化しばかり。

一志は計り知れないショックを受けた。

引越して中学校に入った一志は、周りにエイズを移してしまうことを恐れた。一志はそのために暴行を働き、授業をサボり、みんなから避けられる存在になろうとしたのだ。

自分が口をつけた食べ物を分けようとしなかったのも、橋本とのファーストキスははたいてまで拒否したのも。エイズを誰かに移してしまわないか心配だったからだ。実際、それくらいのことではエイズに感染する可能性はほとんどないのだが、もしかしたら、という不安があった。

一志はごく少数の人間とのみ、親しくなった。小学校時代を友達無しで過ごした一志にとって、中学校は友達と会える貴重な場だ。エイズによる制限付きの寿命の中で、一志は色々な経験をしたいと思っていた。だから、授業はサボっても、不登校という手段を取ることはなかった。

しかし、一志の心の中では激しい葛藤が繰り広げられていた。誰かにエイズを移してしまうのではないかという恐怖と、限られた時間の中で色々なことをしたいという純粋な気持ち。対立する二つの感情も、一志の精神を不安定にする要因だった。

小学校での失敗を踏まえて、中学校では一志の情報が漏れることはなかった。しかし、それは一志がイジメられなくなると同時に、一志がなぜグレているのかを理解する人間もいなくなることの意味していた。

「一志は真実を伝えるべきか、嘘を言うべきか、あの日悩んだ末に本当のことを言ったんだね」

隼人が十五年も昔のことを振り返って、しみじみと呟く。橋本が彼の顔を見ると、隼人は懐かしいような悲しいような、複雑な面持ちをしていた。

二人がしばらく静かに昔を省みていると、唐突に隼人が口を開いた。

「そう言えば、橋本はあの日、一志に指輪をもらったんだよね？」

隼人が橋本の左手を取り、薬指にはめられているものを見る。

一志を一文無しにした、高価なダイヤモンドの指輪はそこにはなかった。代わりにあるのは、赤く煌めく小さな宝石が取りつけられた指輪だ。

「実は、一志はダイヤモンドの指輪を君にプレゼントする予定だったんだ」

橋本はそれを聞いて怪訝な顔をする。

「そう？ でもこれ、ダイヤじゃないわよ」

隼人は楽しそうに笑った。

「実はあの日、一志はダイヤの指輪を落としてなくしちゃったらしい」

「えっ？」

隼人はあの時の一志の様子を思い出しながら、解説する。自然に頬が緩んでくる。

「一志は待ち合わせの商店街に向かう途中で、道の曲がり角から現れた犬に驚いて走って逃げたらしい。たぶん、その時に落としたんだってさ」

橋本は目を白黒させた。呆れたようにため息を吐き出す。

「そう言えば、あの犬が苦手だとか言ってた気がする。じゃあ、この指輪はどうやって？」

橋本が赤い宝石がはめられた指輪を、そっと撫でた。

「その指輪は、犬から逃げた時に地面に落ちているのを見つけたそうだよ」

隼人は十五年前のあの日、一志がダイヤの指輪の入った箱を探して身体中のポケットをまさぐっていたのを思い出す。怪しむ橋本の前に、一志は咄嗟にこの赤い指輪、ガーネットの指輪を取り出したのだった。

隼人は、あの日の前日、一志が雑誌の占いを読み上げていたのをふと思い出す。

『明日、あなたの予定は失敗する。友達や恋人を大切に、だど?』

不機嫌そうな一志の顔がはつきりと脳裏に浮かんだ。結局、あの占いは当たっていたわけだ。

「そう言えばさ」橋本が指輪を取って掲げる。「あの人は本当のことを言うべきか、嘘を伝えるべきか悩んでたんだよね」

「うん。理由を聞いたらさ、動物には嘘が分かるんだって意味の分からないことを言われたよ」

橋本はそれを聞いてふふつ、と笑った。

「サクセスっていう雑誌、知ってる?」

隼人はそれを聞いて頷く。

「うん。あの占いとかが載ってるやつだね」

橋本はガーネットの指輪を隼人に差し出して言った。

「あの日、サクセスを妹に見せてもらったんだけど、一月の誕生石がガーネットだったのよ」

隼人はそれを聞いて「それがどうしたの?」と言いかけ、目を見開く。

「一月、って橋本の誕生月じゃん」

「そう。おまけに、サクセスには宝石の持つ意味まで書いてあったの」

橋本は墓石に目を向け、記憶の中にある知識を引っ張り出した。

「一月の誕生石、ガーネット。別名、柘榴石^{ざくろいし}。 “ 真実・友愛 ” の意」
「おおつ、ピッタリじゃん」

真実の石。まるで、一志が隼人や橋本に本当のことを伝えたことを表しているかのようなのだ。

友愛の石。あの日から十年ほども橋本と一志の関係が壊れなかったのは、ガーネットの指輪のおかげかもしれない。

「今思えば、あの日はエイプリルフルだったのよね」

そうしみじみと呟いて、橋本はため息をつく。それを見ていた隼人は「どうしたの？」と声をかけた。

橋本は苦虫を噛み潰したような顔で語り出す。

「あのエイプリルフルの朝、一志から電話がかかってきたらしいんだけど……」

隼人は頷いて、橋本に先を促す。

「妹が一志の伝言に嘘を混ぜてね、『別れる話をしよう』って私に教えてきたのよ」

橋本は今ではそれもいい思い出けど、と付け足した。

「でもそれ、別れ話つてのは嘘なんでしょ？」

隼人は多少驚いたようで、橋本に確認を取る。一志はそんな話をするなどと、一言も言っていなかったからだ。

「うん。だから、あの迷惑な妹には、こっぴどい嘘でやり返してやったわ。“ 目には目を。歯には歯を ” よ」

怪しげにニヤニヤ微笑む彼女の表情を見て、隼人は自分が鬼と話しているのだと錯覚した。だが、あえてそれは口に出さない。触らぬ神に祟^{たた}りなしだ。

隼人は、自分も橋本に軽い嘘をついてここにやって来たことを思い出す。用事があるから今日は墓参りに来られない、と見せかけて来たのだ。用心していないと、きっとやり返されるだろう——五十倍くらいの規模で。

なぜなら、今日は四月一日だから。
エイプリルフル

橋本の手にあるガーネットの指輪はそんな嘘まみれの日でも、真

実と友愛の赤い色を放っている。

\$

真田はペットショップ内の床を、箒で掃き回っていた。幸村が、例の真田が落とした指輪を探しに行くために職場を休んだので、その分の仕事を真田がやらされているのだ。

「真田さん、あと少して新入りが来るから、その子の世話もよろしくね」

店の奥から女性の店長が現れ、真田の仕事を増やす。

「分かりました！」

真田は密かに舌打ちした後、元気よくそう返事した。昨日の晩、幸村が言っていた奴のことだろう。

ひよつとしたら、幸村は店の仕事をサボるのも兼ねて指輪を探しに行ったのかもしれない。そう考えると、真田は自分が損をしているように思えてくるのだった。

掃除を終え、真田は店の隅にある鳥かごの様子を見に行った。白い大型のオウムが入れられているかごだ。

真田が中を覗き込むと、オウムが喚き始めた。

——コイツ！ コイツ！

どうやら、人の口調を真似ているらしい。昨日、からかわれて腹が立ち、オウムのことを「こいつ！」呼ばわりしたことを真田は思い出す。

真田は大きいため息をついてそこから離れた。オウムと一緒にいると、気が滅入ってしょうがない。

ちようどその時、店の扉が開かれた。目をやると、茶髪を綺麗に整えた青年が入ってくるところだった。

「こんにちは」

元気の良い挨拶とともに入口の所で一礼する。

「君が例の新入りさんか？」

真田は彼を手招きして呼び寄せ、カウンターに置いてあつた新人の資料を手に取った。

「ん、中卒か？」

「はい、俺は頭悪いんで」

真田の問いに正直に答える。あまりに率直に答えたので真田もそれ以上は何も言わない。

「えつと、木村一志君か……なるほど」

一志という青年の資料を見ていた真田は、昨晚、幸村が言っていたことを思い出す。

『そう言えば、明日、ウチに新しい店員が入るつてよ。聞いたところによると、事情ありの奴らしいが』

事情あり。

真田は青年の資料をパタンと閉じる。

——エイズ患者か

真田は咳払いして、青年に仕事の説明をしようとした。しかし、それは青年の声で遮られる。

「あ、あの白いオウム」

青年が鳥かごに近づいていく。

「あゝ」真田は嫌そうな顔でその後を追う。「店の前に怪我して落ちてたんだ。たぶん、どこから逃げ出てきたんだろ」

それを聞いて、青年は真田の顔を振り返った。

「逃げ出てきたんすか。このオウム、何か喋りますか？」

真田は肩をすくめる。

「ああ、口やかましい女みたいにピーピー喋るぞ。『バーカ。へへッ、アホだ』なんて戯れ言も覚えてやがる」

青年はそれを聞いて怪訝な顔をした。思案するかのように宙を見つめる。しばらくして、その青年は真田に言った。

「それはかなり“気取った”オウムっすね」

意味が分からず、真田は呆気に取られて固まる。

ちやうどその時、真田のズボンのポケットに入っている携帯電話が震え出した。

「あ、ちよつと失礼」

青年にそう言葉をかけ、距離を取ると、真田は電話に出た。相手は幸村だ。

「おい、てめえ」

受話器から飛び出てきたのは閻魔大王のような不穏な声だった。

「どうした、声が不機嫌だぞ」

真田がたじろぎながら訊ねる。

「やつぱり嘘だったろ。ガーネットの指輪なんてねえぞ」

「今どこにいるんだ？ 確かにガーネットの指輪は落とした。白い犬がいる例の場所は調べたのか？ それでもないなら誰かに拾われたとか」

「今は白山ホワイトハウスにいる。それと、正確に言えば“指輪”はあった、だな」幸村が意味ありげな声を出す。「ダイヤの指輪だ」

真田は「はあ？」と呻き声を漏らした。携帯電話を耳に当て直す。「その白い犬の所に行ったらよ、ガーネットじゃなくてダイヤの指輪があつたんだ。お前、確認し間違えたんじゃないか？」

そんなはずはない。確かに、あの盗みに入った晩、ポケットにガーネットの指輪を突っ込んだはずだ。

真田はそれを幸村に伝えたが、「エイプリルフルだからってくだらねえ嘘つきやがって」と不機嫌な声で一蹴された。

「おまけに、代わりにそのダイヤの指輪を持っていこうとしたら、その白い犬に噛まれたんだぞ」

電話の向こうから、「いつてー」と全然痛くもなさそうな声が聞こえてくる。

「それはあれだ」真田は声をひそめる。「動物は悪に敏感だからだ。犬はお前が空き巣だつて知ってたんだ」

真田は返事を待たずに電話を切った。

「友達からっすか？」

真田が戻ってくると木村青年が質問した。

「まあ、同僚だよ」

真田が適当に答える。

——コイツ！ コイツ！

かこの中のオウムが羽を広げて喚き出した。

真田はため息をついてオウムのかごを持ち上げる。店の奥に置いておこうと思ったのだ。客が入ってきて騒がれたらどうしようもない。

——アキス、アキス

真田は凍りついたように立ち止まる。

——コイツ！ コイツ！

偶然か。

——コイツ、アキス！　コイツ、アキス！

それとも本当に知っているのか。

真田は背に冷や汗が流れるのを感じた。

「うわ、さすが気取ったオウムっすね。覚えてる言葉にろくなものがない」

青年は啞然とした表情でオウムに見入っている。その青年が、何かを閃いたかのように突然「あ」と言った。

「そう言えば、この近くで空き巣があつたみたいですよ」

「そうか」

真田は声の上擦らないように、そっけなく返す。

青年に返事しながら、真田は雑誌に書いてあつた占いを思い出していた。

——大切な物を失う。白いものに厄あり

白いもの。

鳥かごの中を覗くと、白いオウムが誇らしげに両翼を広げている。真田はそそくさとオウムの鳥かごを店の奥へ持ち運び、青年のもとに戻る。

「そう言えば、木村君」

空き巣の話題から離れるために、真田は話を逸らすことにした。

「何でペットショップで働こうと思ったんだ？」

昨晚、幸村がそのような疑問を口にしていたのを思い出したのだ。青年は少し考えてから、答える。

「昨日の夜、このペットショップの前に来たんですけど」窓の外に青年は視線を移す。「その時、閉店時間を過ぎてて、店からニット帽をかぶった人とサングラスをつけた人が出てきたんですよ」

真田はズボンのポケットに入っている、自分のトレードマークのサングラスに手を添えた。店にいるときはさすがにつけていないのだ。

「その二人が話してて」

「どんな話をしてたんだ？」

真田はとりあえず質問しておく。

「動物は正直者だって」

「そうなのか」

「昔、俺もそういう話を聞いたことがあったんですよ」木村青年は小さく笑った。「俺、嘘つかれるのが嫌いなんだ」

真田は店の外を見つめる青年の瞳に、深い想いが込められているのを感じ取った。

「だから、嘘をつかない動物達の近くにいたいというわけか？」

「そういうことっすね」

真田は青年についての資料を思い返す。

エイズ。

それが関係してるのかもしれない。

青年は真田の顔に目を戻して笑った。どことなく、悲しそうに見える。

「幸村さんはいつからこの店で働いてるんすか？」

真田は眉をひそめた。

「幸村？ 俺は真田だ」

真田が訂正すると、青年は拍子抜けしたように「あれ？」と漏らした。

「俺の担当者は幸村さんだって聞いてたんですが」

「ああ」真田は納得したように頷く。「サボリやがった。で、俺が代わりにそいつの分まで働いてるわけだ」

「さ、サボリですか」

何と言えいいのか分からないようで、木村青年は苦笑いした。

「そう言えば真田さんと幸村さん、合わせて真田幸村ですね。偶然ですか？」

真田はそれを聞いて真顔で返事する。

「空き巣仲間だ」

青年の顔が凍りつく。

「えっ？」

真田は鼻歌を奏でながら、カウンターに向かう。ドアが開き、家族連れの客が入ってきた。

「四月一日だ」
エイプリルフール

真田が怪しげな笑みを浮かべて青年を手招きする。青年は戸惑いつつも駆け寄った。

「病気だからって容赦はしねえぞ。しっかり働いてもらっぜ」

「は、はい」

木村青年がそう返事すると同時に、店の奥から女店長が現れた。

「あら、真田さんまだいたの？ お通夜があるから、早退するんですよ？」

店長は腕時計を見ながら言った。真田は忘れていたかのように「あっ」と声を漏らす。

「新人君に仕事の説明とかはした？」

という店長の問いかけに、真田は真面目な顔で「はい」と頷いた。木村青年は驚いて目を見開く。いつそんな話をしたのだ。

「で、幸村さんが言っただけで新人さんも仕事は明日からに変更になったそうね」

「え？」

青年は突拍子もない話に仰天した。先日、店長から今日から仕事を始めると電話がかかってきたのだ。

「そうらしいですね。じゃ、一志……だっけ？ 車で家へ送るからこっちに来いよ」

「えっ？ えっ？」

真田は青年の腕を軽く掴んで店の裏口へ向かう。

「お疲れ様です」

「はい。気をつけて」

真田がそう規則通りに挨拶すると、店長はにこやかに微笑んで言葉を送った。

店の外に出ると、一志は引きずられるように真田の車へ連れて行かれた。

「そんなじゃ、就職おめでとうパーティーにでも行くか」

助手席に座った一志に、真田はニヤニヤと笑みを浮かべる。

「あの、どうなってるんすか？ 真田さんはお通夜なんじゃ——」

「エイプリルフルだ」

一志の言葉を真田がピシヤリと遮る。

「パーティーって、俺、何も金持ってないっすよ」

「大丈夫。幸村と俺の驕りだ」^{おこ}

一志は目を皿のように丸くした。

「最近、ちよつとした収入があつてね」

他人の家に空き巣に入つたんだ、とは口が裂けても言えない。

「パーティーって、どこ行くんすか？」

「白山ホワイトハウスだ。山の中腹にある、観光名地の」

一志はますます混乱し、金魚のように口をパクパクと開閉させる。

「あそこは四季折々の風景が見られるからな。今頃、幸村がレストランでいい席取ってくれてるはずだ。ちようど桜の花見日和だぜ」

真田は驚く一志を見て楽しんでた。

春休みということもあり、車はすいすいと滑るように公道を進んでいく。

「のどかでいいねえ」

道路脇の公園で、小さな少年達が四人、木の枝を持ってチャンバラごっこをしている。

真田の車はあつという間にその横を通り過ぎた。

太陽は少し西に向かって傾いている。

（後書き）

いかがでしたか？ まだまだ未熟な文ですいません（T-T）

連載小説そっちのけで書いておりました。

あ、嘘です。

連載も少しは書いておりました。投稿してないだけです。まあ、一ヶ月のほとんどをこの作品をのんびり書くのに費やしていたわけですがww

感想・評価お待ちしております（^ー^）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6465k/>

泥棒エイプリルフル

2010年10月8日15時06分発行